2023 年度　（令和 5 年度）　学校評価自己評価表

加茂　中学校区	校番　39	福山市立　加茂中　学校

最終更新日	2024年(令和6年)2月20日

Ⅰ　福山市

ミッション　福山に愛着と誇りを持ち，変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン　「福山１００ＮＥＮ教育」の基本理念のもと，各中学校区・学校が「２１世紀型“スキル＆倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し，日々の授業を中心として評価・改善を進めながら，子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状
・幼保小の連携は，これからも密に行ってほしい。また保護者のつながりもつくるとよい。 ・不登校児童に対する取組を継続し，改善に努めてほしい。 ・コロナ禍の中で学校は取組を進めている。再編後も地域とともにある学校づくりに努めてほしい。	・１小１中 〇中１ギャップは少ない △友人との関わりや見方が固定化，互いの新たな可能性や成長に気づきにくい ・不登校・不登校傾向の児童・生徒 加茂小…増加　加茂中…減少 ・生活面 △学習習慣，規範意識 等 ・学力面 △基礎学力の定着・思考力等に課題

育成する力 (21世紀型“スキル＆倫理観”)	課題発見・解決力　コミュニケーション力　あきらめない心
めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	学びを楽しむ・学びを活かす子ども 夢を語れる・自分のことを語れる子ども
中学校区として統一した取組等	①幼保小中連携 子ども・教職員の交流を通して，幼児期から小中学校までの学びをつなぐ 「幼保小・小中・幼保中」連携した教育活動の実践 ②地域とともにある学校 CSを導入し，学校・家庭・地域が連携した教育活動の充実を図る 地域素材を活用した教育活動の実践

Ⅲ　自　校

ミッション

加茂中学校で学んでよかった
加茂中学校へ通わせてよかった
加茂中学校で働けてよかった　　と思える学校

学校教育目標

ともに　学び合い　高め合う

現　状

〈児童生徒〉
〇課題解決などに向けて、協力したり支え合ったりする姿が見られる。
△固定化した人間関係が小学校から出来上がっており、幅広いコミュニケーションが取りにくい。
△家庭学習１時間未満の生徒が、平日６割強・休日７割強。習慣化して粘り強く継続することがむずかしい生徒が多い。
△２学期や３学期の始めから、急に休みが増え始める生徒がいる。

〈授業〉
〇ICT機器の効果的な活用を考え、授業に取り入れている教職員が増えている。
△疑問を引き出し解決する授業づくりをめざして研修を重ねているが、教師主体の授業から抜け切れていない。

育成する力 (21世紀型“スキル＆倫理観”)	課題発見・解決力	コミュニケーション力	あきらめない心
めざす子ども像	〇現状を分析したり、新たに直面した事象を把握するなどして、課題を見出すことができる。 〇既習の知識・経験や他者の考えなどを、比較したり、関連付けたりしながら、解決への道筋を立てることができる。	〇さまざまな表現方法で、自身の考えや思いを、自信を持って発信することができる。 〇他者の考えや思いに傾聴し、多様性を尊重することができる。 〇協働する中で、新しい価値観に気づいたり、互いに高め合う関係を築いたりすることができる。	〇主体的に「やってみようと」いう、高い意欲や好奇心を持っている。 〇仲間とともに、多様な方法を出し合い、試行錯誤しながら、何とかやり切ろうと課題に向き合っている。 〇最後まで、あきらめない、粘り強さがある。

研究	テーマ	疑問が生まれ、多様な学びを楽しめる授業づくり
	内容等	〇 主体的・対話的で深い学びのある授業をつくるための教材研究と授業実践を繰り返す。 〇 自分の授業を振り返り、見出した課題を解決するためのテーマを各自が設定し、他の教職員と対話・協働しながら探究する。
めざす授業の姿		生徒達が、ともに学び合い、高め合うことで、 「?（なぜ・どうして）」が、「！（わかった・できた・なるほど）」 になる授業

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立　　加茂中　　学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月１日） □指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	最終評価（２月末） □指標に係る取組状況 ◎短期（中期）経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
1	自ら学び，仲間とともに，協働して学習を創造する子どもの育成	★	新規	・自己や他者などとの対話により，考えを深めることができる子どもを育てる。 ・家庭学習の習慣を身に付けた子どもを育てる。	・既習事項や他教科での学びを，授業での課題解決につなげられるようにする。 ・家庭学習が，次時の授業や課題解決につながる工夫をするなどして，学習の必然性が感じられるようにする。	・「各教科などで学んだことを生かして考えている」「話し合いで，自分の考えが深まったり，広がったりしている」生徒80%以上 ・「家庭学習1時間以上」の生徒60%以上	・「各教科などで学んだことを生かして考えている」の肯定的評価は76.6%であり，おおむね達成している。「話し合いで，自分の考えが深まったり，広がったりしている」の肯定的評価は87.3%であり，目標達成している。 ・「家庭学習を１時間以上行っている」の肯定的評価は39.3%であり，目標未達成である。	３	２	・授業で，既習事項や他教科での学びを生かす場面を仕組んだり，生かし方を具体的に示したりするなどして，知識・技能の主体的な活用を促す。 ・自ら前向きに家庭学習に取り組む習慣が身に付くよう，既習内容の復習や課題の大切さを具体的に伝えたり，自分に必要な学習課題を自己選択・決定できるようにしたりする。	□授業改善により，対話等を通して思考を深める授業づくりや，学びを授業以外の場面につなげる活動を効果的に仕組むことができなかった。家庭学習の定着につながる取組が不十分だった。 ◎「各教科などで学んだことを生かして考えている」生徒は80.4%，「話し合いで，自分の考えが深まったり，広がったりしている」生徒は83.3%で，ともに目標を達成している。 数値上は達成しているが，質の高い思考を促す授業にはなっていない。 ◎「家庭学習を１時間以上行っている」生徒は55.0%であり，目標を達成できなかった。	３	２	２	・対話や思考を促す授業づくりについて，小中間で，授業を見合ったり，対話したりする機会を増やすことで，授業のイメージを持つ。 ・校内で，教科等によるチームを作って，日常的に互いの授業を見合ったり，教材研究を一緒に行ったりすることで，中学校全体として授業改善への意識を高める。 ・「学ぶことは楽しい」授業，「？（なぜ・どうして）」から「！（わかった・できた・なるほど」につながる授業づくりを進め，学びを整理する「レポート」活動を考え，書く実践をする。 ・既習内容の復習や反復練習をすることが，知識や技能の定着につながり，生活にも役に立つという実感を生徒が持てるように，ショートスパンで小テストを行ったり，学んだことを活かせる行事を組み込んだりする。
		★	新規	・学力分析等に基いた授業改善について，教材研究を中心に据えた校内研修を充実させる。	・日常的に自分の授業を振り返るとともに，互いの授業を見合うことで，子どもたちと授業の現状を把握する。 ・学年を超えた教科の内容やその系統に関する理解を深める。	・「人はどのように学ぶか，何につまずくかについて関心をもち，教材研究を行っている」教員80%以上 ・「教科の面白さを実感している」教員90%以上	・「人はどのように学ぶか，何につまずくかについて関心をもち，教材研究を行っている」教員78.5%であり，おおむね達成している。 ・「教科の面白さを実感している」教員78.5% であり，教員が学びへの探究を高めることに課題がある。	３	２	・教員どうしの対話を活発にする。まずは，管理職・主任・主事が日々の授業づくりや生徒の様子等についての対話を生み出していく。 ・放課後の時間等を利用し，自身の教科について教材研究する時間を意図的に設定する。その際に同じ教科に限らず他教科の先生とも対話ができるような場にする。	□「数」や「ことば」にこだわり，学習内容の本質にせまる授業を実践するために，「めあて，問い」の設定を全教員共通の取組としたが，実現していない。 ◎「人はどのように学ぶか，何につまずくかについて関心をもち，教材研究を行っている」教員は84.2%，「教科の面白さを実感している」教員は100.0% で，ともに目標を達成している。しかし，授業改善につなげることが十分にできていない。	３	３	３	・校内研修で「めあて，問い」などをはじめとした教材研究についての議論を行うとともに，日常的にも授業づくりについての対話が職員室で飛び交うような仕組みをつくる。（３学期は，職員室内に，学びを促す効果的な問いを学年ごとに掲示し合い，質を競っている） ・すべての教員が「教科の面白さを実感している」ことから，自身の教科の面白さをいかに生徒に伝えるかを考え，形にする。（教科に係るクイズを廊下や階段に掲示したり，実物見本や機器を置いて自由に生徒が触れられるコーナーを廊下に設けたりするなどの案が出始めている）
1	違いを認め，ともに高まり合う集団の育成	★	新規	・命を大切にする学びを推進し，他者に感謝する心や仲間を思いやる心を育てる。 ・多様な子どもに対応し，学びを切らない，学びへの展望が持てる取組を進める。	・道徳･総合的な学習の時間･いのちの教室などを通して，多様な価値観や命の大切さを感じられるようにする。 ・多様な子どもたちが安心して過ごせる居場所をつくるとともに，家庭や別室にいても学べる環境を整える。	・「他者の考え方を尊重している」「感謝を”ありがとう”」の言葉で伝えている」生徒90%以上 ・「安心した学校生活が送れている」生徒90%以上	・「他者の考え方を尊重している」「感謝を”ありがとう”」の言葉で伝えている」の達成率は96.0%であり，目標は達成している。 ・「安心した学校生活が送れている」生徒の達成率は92.2%であり，目標は達成している。	３	２	・道徳や総合的な学習の時間，教科の授業や行事など，学校生活の中で，他者の思いに共感したり，第三者の視点で自分を客観的に見つめたりする場面を意図的につくる。 ・教職員どうしが日々対話をすることで，子どもたちの特性や多様な価値観を共有し，誰もが教室外でも子どもたちに寄り添えるようにする。	□生徒が自分自身を見つめ直すため，「冬休みに成長したいこと」について他の生徒との間で，自己開示や他者理解を促す活動を行ったり，ふるさと学習で，地域の方々の声を聞いたりすることで，多様な考えに触れたり，自己を見直したりすることにつなげている。 ◎「他者の考え方を尊重している」「感謝を”ありがとう”」の言葉で伝えている」生徒は95.4%，「安心した学校生活が送れている」生徒は96.7%で，ともに目標を達成している。	３	３	３	・生徒会活動や学校行事を教職員が決めるのではなく，生徒たちが主体的に計画，運営していけるよう，適度な距離を保ちながら最低限の助言や促しを行う。活動や行事後には，子どもたちが自己肯定感や主体性を高められるように肯定的評価を行ったり，お互いの意見や個性を認めあることやコミュニケーションの大切さなどへの気づきが得られるよう声かけをする。 ・授業や学活などで，教職員が自身の身近な話題や体験談などを生徒に語ったり，生徒の話に傾聴したりすることで，互いの価値観に気づき距離を縮めたり，新しいことに触れる楽しさや知ることの面白さなどを実感したりする時間をつくる。
1	地域とつながり，地域の活性化に貢献できる学校づくりの推進	★	新規	・地域に感謝し，貢献しようとする子どもを育成するとともに，地域に喜ばれる教育活動を推進する。	・地域教材の活用や地域人材を招いての学習等，「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」学習を創造し，実践する。 ・地域の魅力や課題を発見し，誇りに思ったり，より良くしたいと感じられるようにする。	・「地域のよさを語れる」「地域に貢献している」と思う生徒90%以上	「地域の良さを語れる」の肯定的評価は，64.0%であり，目標未達成である。また，「地域に貢献している」の肯定的評価は39.4%であり，目標未達成である。	３	２	・総合的な学習の時間での授業を中心に，加茂地域についてより深く調べ，体験学習なども取り入れながら地域のよさや魅力を体感していく。 ・職場体験や地域行事への参加だけでなく，地域に関わる小さな活動や取組も立派な地域貢献であることを共有し，行事や活動・取組に積極的に参加するよう促す。	□ふるさと学習を軸として，各学年で地域の魅力発見や体験学習に取り組んできた。 ◎「地域のよさを語れる」生徒は，1年44.3%，2年67.8%，3年68.9%で，全体では60.4%である。学年があがるごとに地域への意識が高まっている傾向にある。 ◎「地域に貢献している」生徒は44.6%であり，目標達成はできなかったが，生徒は様々な形で地域を意識した活動をおこなう中で，地域を意識するようになっている。	３	２	３	・総合的な学習の時間を全ての教科等の学びの軸とし，「ふるさと学習」を通して，生徒自らが加茂地域（山野・広瀬・加茂）のよさや魅力を体感し，地域の課題を自分の課題と捉え，よりよくする方策を考え，取り組んだり，発信したりする学びをつくっていく。 ・小中9年間のふるさと学習に係る学びの系統を立てたカリキュラムを，取組を進めつつ改善し，より充実したものへと進化させる。 ・次年度，ボランティア部を創設し，地域行事や地域活動への主体的な参加を呼び掛ける。
1	教職員が生き生きと働ける職場づくり	★	新規	・校務の効率や質を高め，各自が時間を意識した働き方を推進する。 ・各自が，仕事に対する充実感やモチベーションを向上させる。	・ICT機器について，これまでの活用の見直しや新たな活用方法等による業務の効率化を図る。 ・管理職･主任主事が中心となり，職員室などで，授業づくりや子どもたちの様子などについての対話を生み出す。	・「仕事にやりがいを感じている」教職員90%以上 ・在校時間外勤務，月45時間以内の教職員100%	・「仕事にやりがいを感じている」の肯定的評価は64%，「教職員どうしの対話が充実している」の肯定的評価は50%である。生徒を中心に据えた対話を充実させることを通して，仕事へのやりがいを充実させることに課題がある。 ・「45時間以内を意識した働き方の工夫をしている」の肯定的評価は78.6%であるが，「45時間以内の教職員」は，68%である。	３	２	・もの，データの整理整頓を行い，効率的な業務が行えるようにする。 ・生徒を中心に据えた対話や教職員どうしの困り感などの対話を通して，協働意識をもって取組を進める。 ・業務の精選を行い，管理職，主任主事が中心となり，業務の整理，分担を進めることで効率的な働き方を推進する。	□ 主任・主事が率先して対話を仕掛けるなど，主体的に意見を出し合える環境づくりを推進した。 ◎「仕事にやりがいを感じている」教職員は92.3%，「教職員どうしの対話が充実している」と感じる教職員は80.8%で，目標を達成した。 ◎「45時間以内を意識した働き方の工夫をしている」教職員は88.5%，「45時間以内」の教職員は96%であり，中間に比べ大きく改善したが，目標を達成することはできなかった。	３	３	３	・上記のさまざまな取組を実現し，生徒や学校，地域の変化を教職員が実感することで，仕事へのモチベーションややりがいを高める。 ・管理職と主任主事が中心となって，学校行事や校務を見直し，存廃や改善などの整理を実施する。同時に，個々の教職員が，自身の業務内容や働き方について見直す。その際，昨年までやっていたから続けるというのではなく，子どもたちの学びのために意図的に仕組まれたものか，必要なものかの視点で吟味する。 ・役割の明確化，自覚化を推進することで，分掌を機能させる。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。